2 月 11 日のメッセージ

聖書：ヨハネによる福音書　6：1－15

「欲しいだけ分け与えられた」

信じて、祈り願い、「その時」を待つ。ただそれだけのことのはずなのに、どうして私たちはそれができないのでしょう。「よかれと思って」と銘々勝手に考えたり、動いたりしてしまうのはなぜでしょう。「委ねる」ことのなんと難しいことかと思います。

男だけで 5000 人もの人を前にして、イエスはフィリポに尋ねられました。「この人たちを満腹にするにはどうすれば良いか」と（「イエスは目を上げ、大勢の群衆が御自分の方へ来るのを見て、フィリポに、『この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか』と言われたが、」ヨハネによる福音書 6:5)。イエスが期待しておられる答えは単純明快です。「神に祈り願い、待ちましょう。」この答えだけで十分でした。

しかし、フィリポはつい、自分で考えてしまうのです。「200 デナリオン(およそ 200 万円)では足りない。では、どうすれば……」と堂々巡りに陥ってしまいます(「フィリポは、『めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう』と答えた。」ヨハネによる福音書 6:7)。アンデレもまた同じです。目の前にあるわずかなパンと魚では足りないと諦めてしまいます(「大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たない……」ヨハネによる福音書 6:9)。

信じて委ねるだけで良いにもかかわらず、人間はつい独り相撲を取ってしまうのです。

先日、天に召された方のご家族と話していて、気づかされたことがあります。「母は延命治療を望んでいなかったので、その通りにしました。」この言葉にはっとさせられたのです。お子さんたちはキリスト者ではありません。けれども、母が信じているものをしっかりと受け止めて、自分たちの思いよりも優先させておられました。

人間的な思いはある。エゴもある。けれども、それらを超えて大切なものがあると知ること。そこに、自分たちの思いを重ねていくこと。これが、「委ねる」ということなのだ、と。

聖書もその言葉を後押しします。

「さて、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。」(ヨハネによる福音書 6:11)

イエスが祈ってから分け与えられると、5000 人もの人が十分に満足するだけのパンと魚が与えられました。その時に必要な糧を必要なだけ、十分に満たしてくださいました(「わたしの神は、……キリスト・イエスによって、あなたがたに必要なものをすべて満たしてくださいます。」フィリピの信徒への手紙 4:19)。

ただ委ねるだけで良いことはわかりました。ではなぜ、イエスはそのことを教えるのではなく、試みられたのでしょうか(「こう言ったのはフィリポを試みるためであって、御自分では何をしようとしているか知っておられたのである。」ヨハネによる福音書 6:6)。

教わっただけのことは、右から左に抜けてしまうように、肝心なときに役立たないことがあります。一方、身を以て体験したことは単なる知識よりも遙かに定着しやすいものです(「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることを知らせるためであった。」申命記 8:3)。

だから、イエスは常に問われるのです。

困ったときにこそ、自分たちが神の民であることを思い起こさねばなりません。神に生かされ、養われている一人であることに立ち帰らなければなりません(「主はわたしたちの神、わたしたちは主の民／主に養われる群れ、御手の内にある羊。今日こそ、主の声に聞き従わなければならない。」詩編 95:7)。

それを怠ったとき、私たちは失敗を繰り返してしまうのです。

「欲しいだけ分け与え」てくださる神に全てを委ねて、祈り、願い続けましょう。